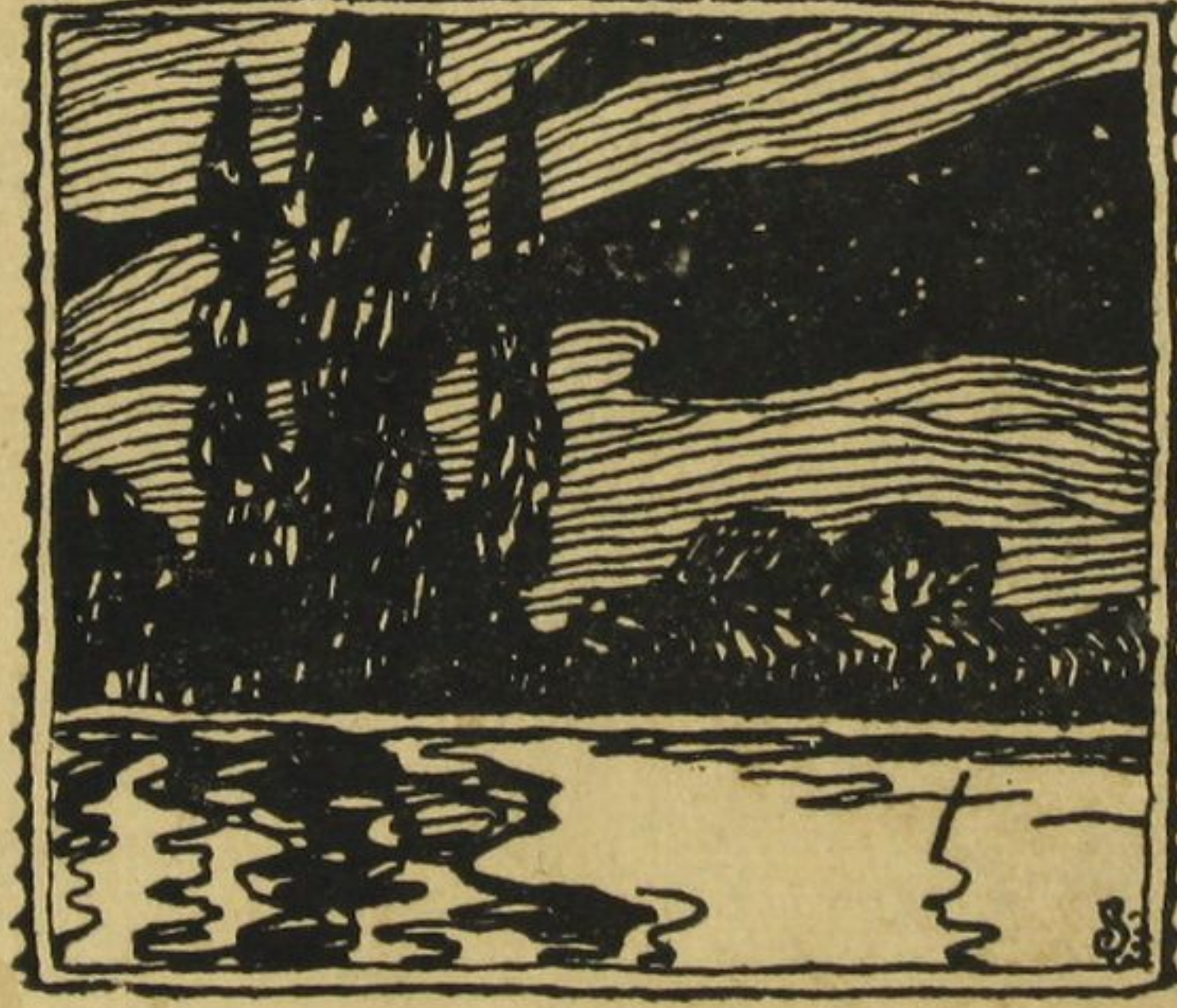


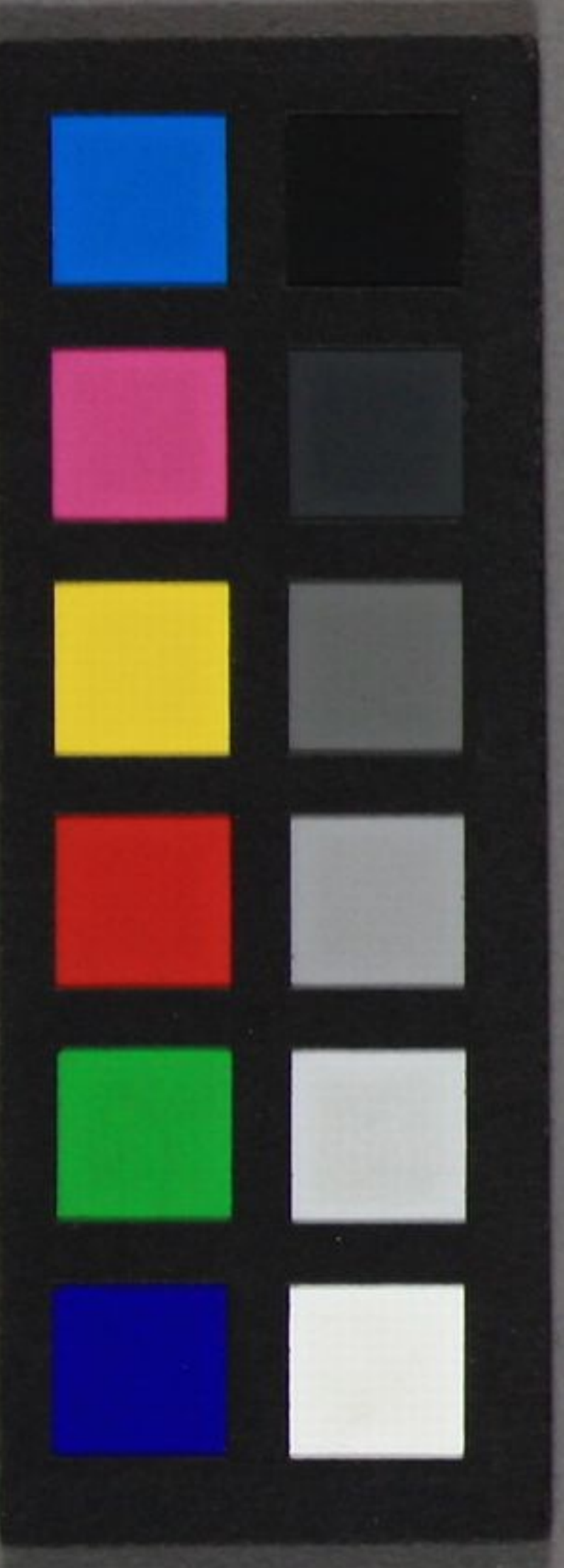
集 歌

空 星

著 園 薰 子 金



版 社 潮 新



星

空

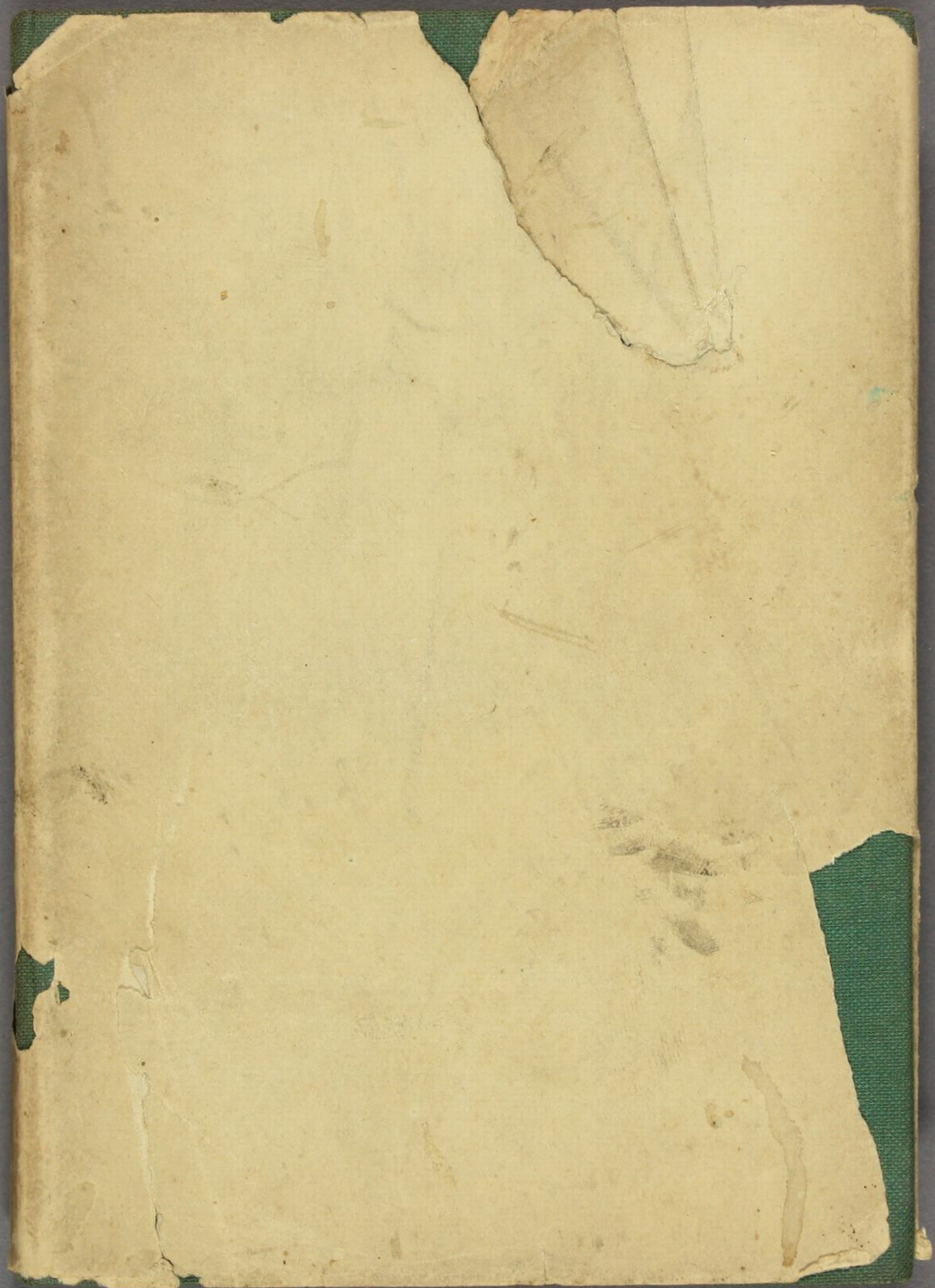
金

子

薰

著

著



集 歌

空 星

著 園 薰 子 金



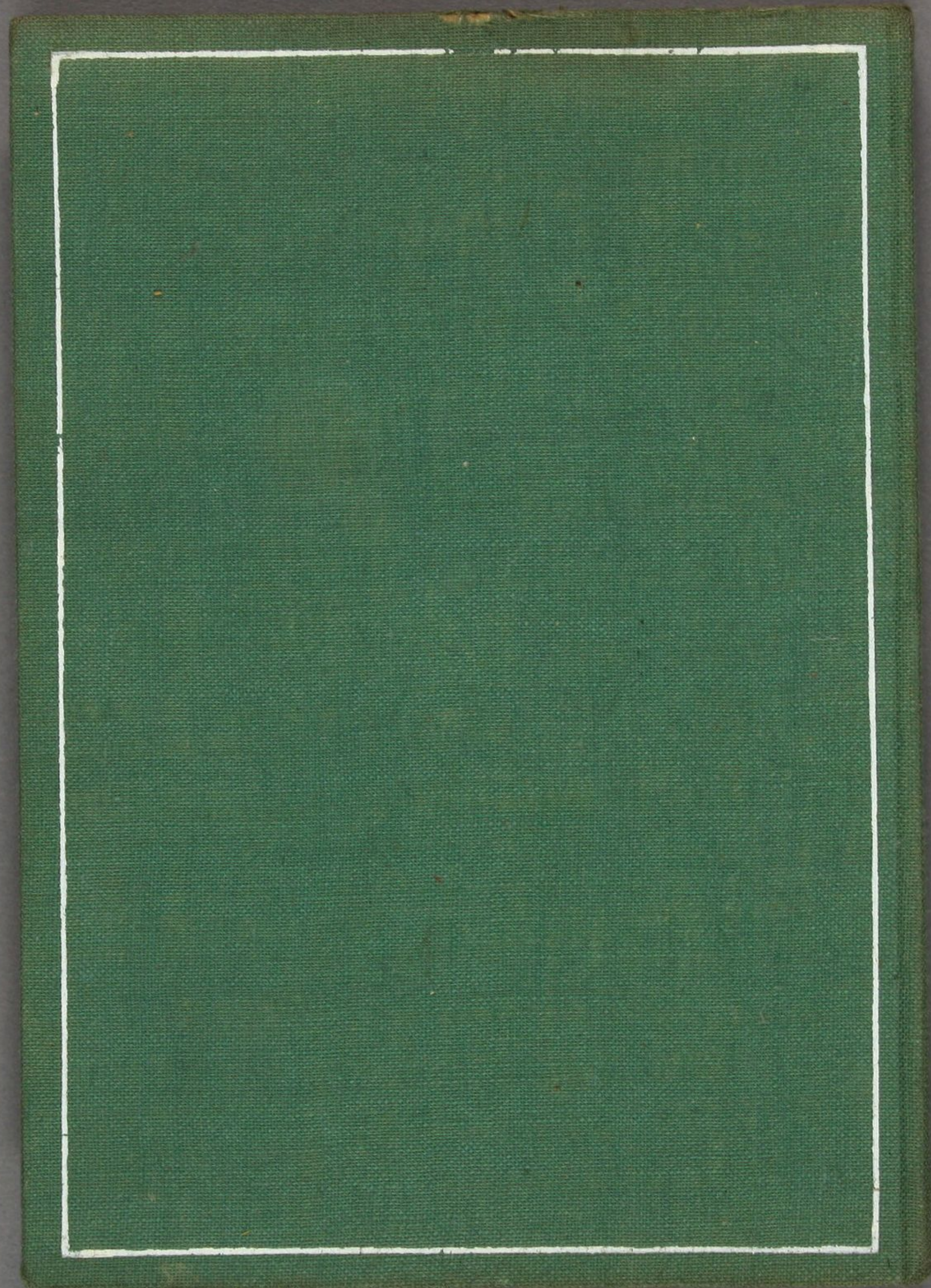
版 社 潮 新

星

空

金 子 薰 園 著

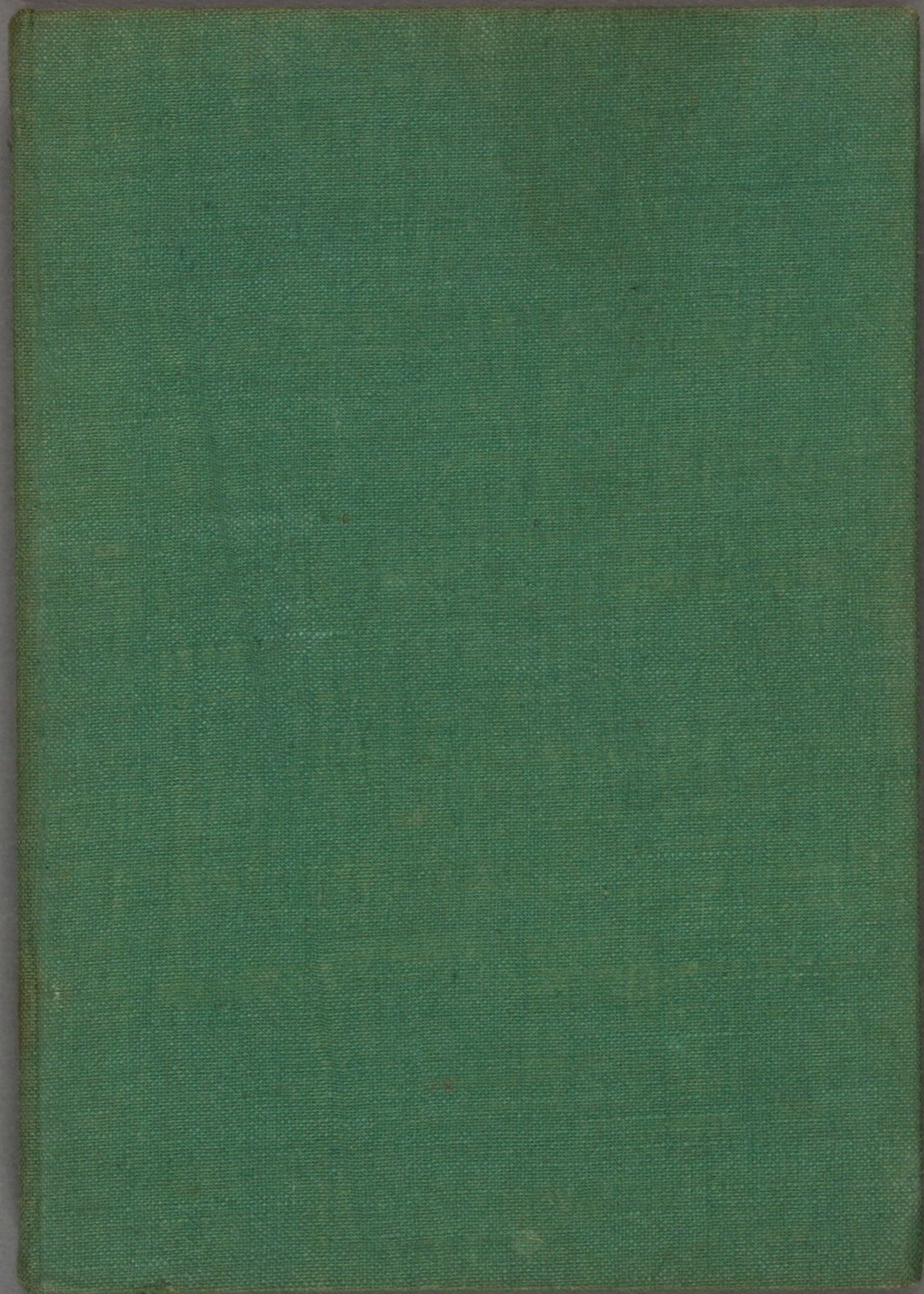


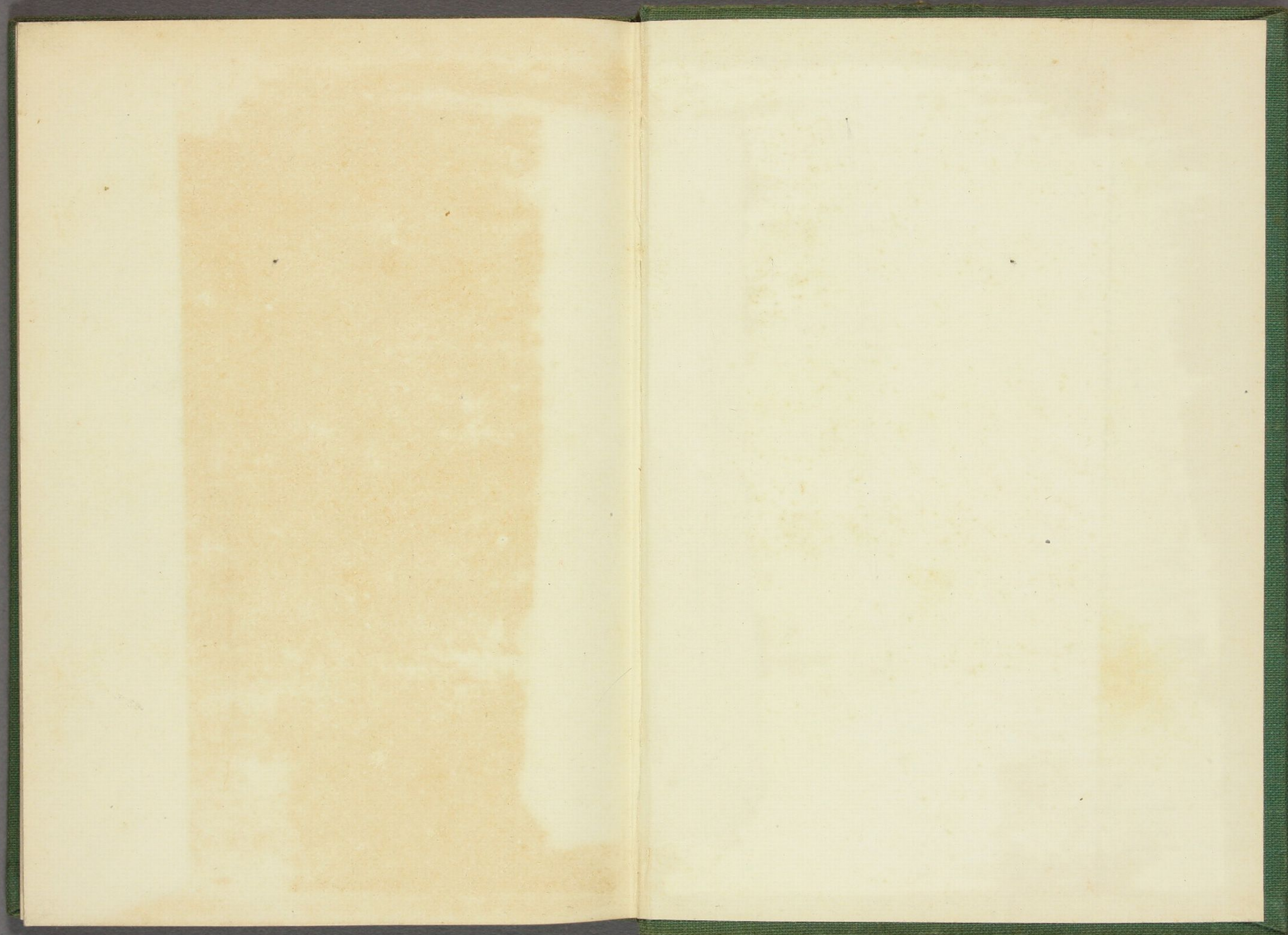


星

空

金子薰園







集 歌

星

空

金子薰園 著

次 目

春草のはてに……………	一
秋に浸る……………	三五
父の家……………	五三
植物園の青空……………	八五
妹をかなしむ……………	一四一
旅の手帳より……………	一六三
兒がこゝと……………	三〇三

春草のはてに

春草のはてに

春草のはてにゆふべの星空がちかぢかとして低  
くも見ゆれ

わが立つとも知らず一樹に鳥が啼く、日没ごろの  
消えゆく明りに

高原の春の夕をとぶ鳥のまうへに星のまたたき  
けるも

笛のごとき音をたてにつつ飛ぶ鳥に山上さんじやうの原は  
なほ暮れずあり

春の夜はふけぬ見上ぐる並木のうへ星の光のね  
むたかりけり

枯草を焼く

枯草の土手に火を焚く工夫等のあからむ顔を見  
ればさぶしも

枯草の土手に火を焚く工夫等のかたへにありて  
われもぬくもる

枯草を焼きてぬくもる工夫等の食後に吸へる巻  
煙草かな

田の畔ほとに枯芝を焼く老農の頭の白髪しろが火に燃ゆら  
むぞ

枯芝を焼ける焔の陽ひに黒み凍る水田にうつりた  
るかな

ひるもなほ暗き水田に残る雪凍れるままに幾日  
經にしぞ

土手の松一本高し陽を浴びて葉ごとの光り風に  
ゆれるる

暮春の路

薄暮はくぼの芝公園を散歩するわれらのうへの空の星  
かな

暮の色掩ひきたりてからかねの寺院の屋根の青  
光りかも

みちばたに生ふる山菅、黒みくる暮色ぼしよのなかにゆ  
れるたりけり

たちどまりわれらの瞳一やうに篠懸の上の星を  
見たるも

さしもあれし風鎮まりてあをぐるき木立のうへ  
の落日ゆづりの空

木蔭より木蔭へわれら音もなく暮春ぼしゆんの路をあゆ  
みてゐたり

公園の廣場ひろばのうすら明るみにはじめて顔を見合  
せしかな

木のかげの煙るがとき胡蝶しや花がの花見てをれば  
あたり霏したつらしも

公園をいでむとしてくれの闇ぬちの木木に別れ  
をいふ心かな

松の葉と蓮華

針の如き松葉の尖さきにかるがると動く雀に秋の陽ひが燃ゆ

松の葉の尖さきに陽ひが燃ゆ、すれすれによぎる雀のつばさの光り

ふかぶかと地上に秋の陽ひぞ燃ゆる、骸なごみの蝸かたふと落ちにたり

蝸かたが啼きやみたれば月空つきぞらにあきらけく夜となり  
にけるかも

秋風は一樹いっじゆの高き枝えをふかす、ひそやかにして下くだ枝えの葉に見ゆ

朝なり、蓮華れんげがはらりくづるれば水にさざ波さゆ  
らぐあはれ



ほんのりと紅<sup>あか</sup>き蓮華の花びらが浮べり夜<sup>よ</sup>はまだ  
明け切らず

しのめの池いちめん<sup>を</sup>の青蓮<sup>あせ</sup>にどつと涼しく風  
鳴りすぐる

あかつきの雲が動けば青蓮<sup>あせ</sup>の葉かげの花は蕾<sup>つぼみ</sup>を  
開く

蓮の華ひらく音かも葉音かもあかつき闇はしろ  
じろ晴れず

うすぐろく水にかげする白蓮華しつとりとして  
あけちかきかも

あかつきのしづけさに蜻蛉きてとまり蓮のつぼ  
みを揺<sup>ゆ</sup>かしにけり

合歡の花の憶ひ出

合歡の花しんとせる家の窓ちかくろすくれなる  
に咲いてゐたりき

その家に女をんなさみしく住みにしが、時折り「伊勢」を讀  
みてありしが

そのころの通りすがりに合歡の葉のかけより白  
き顔の見てゐき

合歡の花山の湖畔の夕ぐれにひと木ほのかに立  
ちてあるかも

魚買ひに白服を著しコツク來る濱に夕月ひかり  
合歡さく

合歡の花見たことのある封筒ふうとうの出だし名なを見れば  
涙にじみ來

あはれその人は死にもえずありしかな合歡あはれ花はなが  
こぼれぬ長き手紙に

うすれゆくその窓ぎはの夕あかり合歡はほのか  
に咲いてゐたるも

自殺者の手帳よりはらり落ちたりし花は合歡な  
りき涙おぼえし

合歡の花病室の白きカーテンにふいとさみしく  
ちりかかりけり

いらだてるころしづまり薄暮あせのうすら明りに  
蝸ひぐらしをきく

### 秋の湖上

秋のひる湖畔にいでて楊柳やなぎにつなげる旅宿りやどのボ  
ートを解くも

隣室の西洋人は端に出でボート漕ぐわが手を見  
てゐたり

秋ふかき湖水に舟をうかぶれば白き腹見せ鵜の  
翔るも

舟やれば秋しづかなる林影の動きてまたもしづ  
まりにけり

とつぷりと秋の湖上はくれたればしづかに船を  
かへすなりけり

かの二階の西洋人の高どゑのくれし湖上にひび  
きくるなり

青葉ポプラ黄葉せしまでしづけさにわが生きた  
りし湖畔の家かな

秋の日

鳳仙花 秋日あきびに 香かほをさらしるし 猫は動きいだすな  
りけり

母が嫁よめぎ来りしころの 雁かり来紅べにみごとなりしとい  
ひし 祖母おばはも

雁かり来紅べに子規きぎが 臥ねながら 描かきたりし 繪の具の色いろの  
褪さめにけるかな

紫苑しきんさく窓越まどしに 母がよくいひし、頭かぶてられな秋  
あつきにと

笙の音

しいんとせる中に 笙しょう筆ひつ簫しょうが 鳴る、人の終は焉りの来れ  
るごとく——以下五首、妹の病篤びやくきころ——

死が人にうつり来れるゆふべかも 笙筆簫は鳴り  
やますけり

秋の葉の木を去る時のひとひらの音にもこころ  
うごく夕ぐれ

妹よ一期のわかれあつけなく眠るがごとく目を  
瞑づなかれ

熟れ切つて落つる木の實の小ささよかなたに秋  
の目が沈みゆく

原いちめん黄葉の夕日、樹の上の猿が木の實を落  
すなりけり

風だつ日さびしき人の訪ひて來ぬしばしはこと  
ば出でざりしかな

落葉ふかし

父の眼になみだが見ゆと、母に兒がいひゆきしこ  
ゑにおどろかれぬる

その朝は落葉がふかしどんよりと空は大きく曇りたるかな

わが胸に迫りて落葉散亂す、目覺むればまたかなしきものを

この朝のふかき落葉を踏んでゐる兒が肩にぽつと薄日が射せり

秋ふかき路上の人は影のごとし落葉をふめどこゑなかりけり

風落ちて夕日のなごり黄なる原落葉をふめば遠きおもひす

林間に久しくありぬ落葉ふみふめども音はあらざりにけり

星あかり夜<sup>や</sup>天<sup>てん</sup>はいまだ明けきらす秋の氣すすろ  
身を斫<sup>き</sup>るごとし

夕ぐれの林は落葉しきりなり空にしづもり星光  
るかも

星ぞらに一點ひかる強き色ほのかに白く落葉を  
てらす

かたはらのわが兒の寢顔<sup>と</sup>外の落葉しんしんとし  
て秋の夜深し

冬ちかし

亭亭と立てる杉にも瘦せの見ゆ芝公園の冬ちか  
みかも

人のかげ來るがごとくきたらぬがごとく黒めり  
冬の夜の靄



遠きちかき一つにうかび灯見ゆふかぶか白き原  
の夜の靄

山茶花に鳥啼き去りて久しかりしみじみとして  
冬の陽ぬくし

ポツンポツン破れ琴を弾く音きこゆ孀ひとり  
の冬の日ぐらし

冬の日

睡るときままに冬日は落葉樹に光落して夕去  
りにけり

度ましくはた親しめるこの心いとしくてならず  
冬の日の影

しみじみと師弟の情冬の日のしづけさにゐてお  
もひたるかな

トルストイに諭さとされし後のしづけさか冬の夕日は沈まむとする

杜翁のそのひと言ことも味へばしみじみとする冬の日の窓

戸外とのもの落葉にこころとられつつ午後の冬ふゆ日にぬくもりてゐぬ

わかき友の額ぬかの繻帶ぬいましろきに窓の冬ふゆ口ぐちはにじみたるかも

岡橙里逝く

君逝きてかへらぬ日かや風悲しく空のはてまで曇りたるかな

近江のや鎌掛かまがけ村むらの秋ふかく永きねむりにつける君はも

いかに呼べど叫べど天あめの下した遠く君はもすでにあ  
らざりにけり

ぢつと思ひ暝とづるわが眼のひまよりぞ涙は頬を  
流れけるかな

梶田半古氏逝く

花落ちてしんかんとせるあめつちに君孤ひとりりゆく  
路をし思ふ

春の夜話エム・シイ・シイの香もふけし天神町の畫ゑ  
室むろおもほゆ

晩春のいまごろなりし、キラソーをついでくれた  
る君が手おもほゆ

ある時は叔父の如くも思ひし人永きわかれとな  
りにけるかな

白王の名さへ歌さへ遠き日のおもひでごととな  
さむものかは一氏、白王の名にて歌を發表せりき

秋に浸る

秋の聲

秋の聲耳を澄ませば遠潮とほしほの空にひびくが如く聞  
え來く

秋の聲早瀬に似たる音たててわがさびしさに沁  
み徹るかな

秋の聲迫りきたれば曉あけちかし星は光を收めたり  
けり

先づ秋はわが庭さきの黄楊わづらの木の繁みに聲を立てそめにけり

晃として閃めく星の光見よ秋は空にも満ち來るなり

遠き樹をうごかす風を見てあれば心靜かに秋に浸るも

郊外吉田園を訪ふ

蕭蕭とそこもしらぬ風を聽け夕の雲に秋の光りあり—以下、途上—

武藏野の一角にわがたたずみて仰げば雲に秋の光れる

武藏野の空飛ぶ雲の光りつつ遠きにゆくを見おくる久し

上<sup>じやう</sup>水<sup>すい</sup>の水白にぞり合<sup>あ</sup>歡<sup>くわん</sup>の花さく草<sup>くさ</sup>土<sup>ど</sup>手<sup>て</sup>をしづか  
にあゆむ

この水のながれて明日<sup>あす</sup>は秋の冷<sup>ひえ</sup>わが飲<sup>の</sup>み水<sup>すい</sup>にあ  
ふれ來<sup>き</sup>らむ

ほつかりと秋雲<sup>あきぐも</sup>うかび甲州<sup>かうしゅう</sup>の街道<sup>まちみち</sup>筋<sup>すぢ</sup>の晝<sup>ひる</sup>の晴<sup>は</sup>か  
な

杉山<sup>すぎやま</sup>は青<sup>あお</sup>ふかく午後<sup>ごご</sup>の陽<sup>ひかり</sup>のこもり風<sup>かぜ</sup>わたれども  
音<sup>ね</sup>せざりけりー以下<sup>以下</sup>吉田園<sup>よしかのぞん</sup>にてー

颯<sup>さつ</sup>颯<sup>さつ</sup>と風<sup>かぜ</sup>杉山<sup>すぎやま</sup>に起<sup>お</sup>りけりちつとして居<sup>ゐ</sup>りがたき  
夕<sup>ゆふ</sup>ぐれ

飼<sup>か</sup>はれたる猿<sup>さる</sup>の苦<sup>くる</sup>しき叫<sup>こゑ</sup>びごゑここにも秋<sup>あき</sup>のな  
やみを思<sup>おも</sup>ふ

齒を剥きて怒れる猿にからかへる大人もありぬ  
秋のさびしさ

秋風吹く

雲動く天の一方秋風の音をきかむと眸をあつめ  
けり

秋風ふく靜かに聽けばその音の鐘の如くも響き  
けらずや

藍青の空蕭寂と大きな秋のすがたにおどろか  
れぬる

颯颯と會我蕭白の風の幅黒く秋さび鳴るをきか  
ずや

いつしんに兒が吹く喇叭秋風のながれさやけみ  
げえにけるかも



一しきり寝起きに啼きし兒も静か戸外を朝の秋  
風わたる

秋晴に父と行く

秋の晴父を誘ひて院展ゑんてんの繪を見に行けるこころ  
たのしも

大觀の「雲來去」見る父と子のこころ一つに遠きに  
あそぶ

父の眼に残れりやかな「雲來去」あゆみゐるて時に空  
を見るかも

のびのびと父は仰向き見たりけり上野の山の高  
き秋ぞら

並びゆくこの幸福の一日にまた逢ひえざる日の  
來ぬらむか

しやんとして高き石段降る父に御手をとらむと  
いひかねにつつ

われになほ父ますことのありがたくうれしく高  
き石段下る

父はところ足らへるごとし相語り上野の山の秋  
の路ゆく

妹の話いづれば父の顔さつとくもれる落葉路か  
な

妹をうしなひてよりそれとなき父のおとろへ見  
らくかなしも

まぼしくも電車の中に秋陽<sup>あきひ</sup>さし繪を見し後の父  
の眼の疲れ

一日も永く世にませわが父とわかるる時にその  
脊を見送る

大いなる背景のごとあめつちにひとりの父のま  
さきくぞある

秋を迎ふ

病みて久し茫漠とせし心もて秋の來るを迎へむ  
とする

妹の柩ぐるまが病みほけし目のまへに黒くあら  
はれにけり

妹の柩ぐるまはしづしづと晝の街路がいろを行くにあ  
らずや

筆ふで策さくの音遠くして妹の柩ぐるまは見れどもみえ  
ず

病む兄はふと妹の墓にゆき昨日の黒きまぼろし  
をおもふ

妹の墓を撫でつつこの半日秋ちかき風のなかに  
浸りぬ

秋風に寺の樹木の鳴るなかを戀ひ歩けども妹に  
逢はず

われよりも先きに死なむといひし汝れまことに  
一人残りたりけり

温かき人の情こころに飢ゑてをり秋風を聴きふつと眼  
を瞑とづ

さびしき時妹のうたを口ずさみなほさびしくも  
なりにけるかな

父  
の  
家

父の家

老いて父のすこやかな顔見るはうれし小日向臺  
の春のまひる日

すがすがし老<sup>おきな</sup>をやしなふ父が家小日向臺の空蒼  
みかも

この人がわれの父かといまさらにちつと見つむ  
る健かの顔

いつしかに二階の障子陽のかけりあくればひろ  
き春の夕ぞら

一杯の珈琲をすするしばらくも父は話をやめざ  
りにけり

足らひたる顔して父のありければいひたきこと  
もいはざりしかな

久久の子がおとなひを喜べる老いたる父の顔の  
よろしも

若きころに日本外史を教へたる父ともおもへず  
老いにけらしな

食後に障子あくればさ庭べの紅梅の花ほつかり  
あかし

久世山が近ければ父とつれだちて散歩す春の夕  
日の中を

父の家に幾夜かいてやすまりし晩春初夏のわ  
がころかな

へだて來し父子のころ融け合ひて春もいつし  
かくれちかきかな

仰ぐそら初夏のみどりのながれたる小日向臺の  
朝のかぜかな

父の家つつじを栽ゑてさかりなり空をながるる  
晝のしら雲

深海の底にあるごとし小夜ふけて洋間の椅子に  
凭りてゐたれば



ことごとと廊下を歩み來る音、父にやあるらし寢  
られざるらむ

父の前憚りて煙草吸ふこともえせず四十を越し  
たるこの子

あのこゑは何ぞと父が耳かたげきく山の手の初  
ほととぎす

父も子も黙りて春の夜ふかきに同じく眠りをお  
もふなりけり

父はやがて寢にかへりけり洋館のひとりの夜ふ  
けしんと冷ゆるも

父を送り洋館の扉を鎖せし時さびしくわれも眠  
らむとおもふ

見上ぐればダンテの像もねむげなり肘椅子ひざいすに凭  
りこのまま眠らむ

母をおもへる

霧が降る、母の墓所はかばへちかづける谷中やなかの道のほの  
じろきかな

竹藪たけくさにいつもの鳥が啼きゐたり濃こき霧がふる濃  
き霧がふる

母がいま生きてあらばなどおもふ墓はかに白蘭はくらんの花  
の匂へる

母まさば父をはなれてわがかたにあらむ孫など  
めでたまふべし

おもへば母が一生ひとよはあをじろきなみだのいろに  
塗られたるかも

母は誰もうらます責めず目を瞑ぢぬわが十一の  
秋寒き夜に

わが歌のはじめての師は母なりきさびしき歌を  
詠みたまひけり

母の歌は妹がよくつたへたり秋かぜの草に咽ぶ  
がごとく

父と母と諍ひするをかたはらに聞いてゐし日の  
わが涙かな

妻を娶らば妻を愛さむとおもひけりあはれその  
ころの子供心に

霧はれぬ母の匂ひする白蘭はてる日をうけてな  
やましげなる

秋風の路

秋風にふるさとを訪ふ路のごと祖母の墓にいそ  
ぐなりけり

秋かぜの朝のながれにわがころただよふ如く  
み寺にいたる

祖母君よ十三年の春秋に冷たき骸とよもなりま  
さじ

静寂はしほしつづけりふと鳴れる墓のうしろの  
森の秋かぜ

ぽつかりと御墓のそばの萬年青の實赤う俯向く  
眸にうつりけり

祖母君よ妹の病むを知りまさむ秋風にわれしづ  
ころなし

秋しるき墓のほとりの楓の葉がさと音して朝鳥  
の立つ

露じめる谷中の路のゆきかへりかくしてわれも  
誰に訪はれむ

一路のかなた \*萩の家先生の御墓の畔にて

師よわれの十とせおなじき姿をばかなしきもの  
におもひ給ふらむ

風かなしく秋を吹くなり御墓扉は萩の露しろく  
濡れにけるかな

御墓扉によりややしばし目を瞑ぢぬわが身ひと  
つの秋の淋しさ

青山の御墓路白き朝露を吹きわたる風に涙くだ  
れり

病院をまかり出づると見上げたる時の空のごと  
青くにじめり

ああ冷たき石碑なりけり秋空の晴れわたれるも  
哀しいかなや

秋の空御墓のうへに澄み徹れりいかで師をこの  
土にかへしませ

師よこの夏清瀧の宿に河鹿きき二十日月夜をい  
ねもえざりき

師よ今し二人の親となれりてふわがくりごとに  
笑み給ふらむ

師よわれの無人の境をゆくごときこの寂しさに  
生きわびにけり

見かへれば御墓は一路のかすかなる彼方となれ  
り蝸のなく

萩寺の午後

\*寺内に先師の萩の歌を刻める石碑あり

秋の碑の石のおもこに秋の日は白く明るくあたり  
りゐるかな

秋早りに石碑は熱くなりゐたりわが倚する脊の  
うへに萩さく

萩が花しづかにしづかにそよぎをり石碑のうへ  
の秋の青ぞら

陽のいろは秋の黄を帯び白萩のすべての花に漂  
ひをれり

水郷の秋の天地のほがらかに明るきなかの午後  
の萩寺

師に逢はむ路ならなくに秋の日の萩寺へこころ  
急がれけるも

秋の川水ひたひたの草むらの萩が花ゆり汽船の  
笛鳴る

路ばたにくだものを賣る女の子しよざいなさに  
青き柿むいてをり

水遠くながれて秋の明るさがみぎはの萩をした  
しく見せけり

秋の日の茶亭さていの前は水流れ蓮田が遠くつづくな  
りけり

杯の重なれば秋の日はたけて蓮田をわたり鐘ひ  
びきくる



目の前の蓮田にほてい草の花、秋のゆふべを薄む  
らさきに

秋寺の鐘か夕べのうす寒き茶亭いづればうしろ  
にきこゆる

われ死なば

この病に死なねばならぬ宿命の如く春夜の灯を  
見まもれる

この熱がにくし出沒きはまりなき魔の如くにも  
われを苦しむ

わが祖母のたふれし病ここにこのひとりの孫も  
たふれむとする

わが師はもわれと同じき年ばへに業成り名遂げ  
失せ給ひたれ

師が御墓久しくたづねまつらざるわがをこたり  
を思へば胸冷ゆ

わが死をこころよりなげく人はみな死んでしま  
へり春の夜の冷ゆ

わがこころ氷室の如し身はほそりくすりも醫師  
も癒すべからず

月 島

月島に繁葉が世帯持ちたりときくからに先づ訪  
ひゆきしかも

事足らぬ中にまめだちもてなせば一杯の酒にも  
われ酔ひにけり

高窓ゆ西日あかるく射し入れば繁葉も酔ひて歌  
ひけるかも

新年は鐵工場の騒音もきこえずこころくつろぎ  
にけり

焼けあとのオルガン工場を吹いてくる風かも春  
の夜のごとぬるし

みぞれふる夜の渡船場の篝火に繁葉が酔のさめ  
し顔かな

うすみぞれ星夜となりて青塗りの船のマストの  
うへを風ふく

ときどきの心

さわやかに朝の鳥なくわが朝を愛するこころお  
のづからなり

わがこころしづかにしづかにと思ひつつあらぬ  
ことをば考へむとする

うつすりと<sup>なつめ</sup>棗あかるみ晝ふかし青葉の陰はいや  
青きかも

春すぎて夏きたるころわが歌を愛するころ切<sup>き</sup>  
りなりけり

夕ぞらに雲わきおこりわが<sup>めぢ</sup>目路の三四の星のき  
えにけるはや

小さなる凭り椅子に兒はかけてゐぬ<sup>おむ</sup>仰向きて白  
き蝶を見てあり

陰鬱の世界をつくりわれとわがさびしみにけれ  
哀<sup>な</sup>しみにけれ

人の話<sup>べ</sup>別の世界のことよりも<sup>け</sup>氣疎くきけるこの  
日なるかな

知るかぎりの人みな疎くおもひけり門を閉して  
けふは眠らむ

青空の白きほそ雲ふと浮びいでし金魚の脊にう  
つるなり

植物園の青空

植物園の青空

護謨ゴモの樹のうへに一すぢ雲の見ゆ植物園の春の  
あをぞら

篠懸ハスのてつぺんにゆらら乾かわびたる實がゆれてゐ  
ぬ風あるらしも

まんさくの黄なる木の花まがなしく春のうす日  
にただよへりけり

ゆれゐるは篠懸しのがへの實か仰ぎ見るわが腫うか春日ま  
ばゆき中に

大なる獵犬がふとあらはれて廣き芝生は青く陽  
に照る

春しづかヒマラヤ杉のひろがれる長き蔭より陽  
はかげりけり

やはらかき龍舌蘭の尖りたる葉がのびのびと春  
の陽を浴ぶ

大銀杏植物園のまんなかに春日をあびて芽もふ  
かずけり

風出づればまづ白樺しろばらのこずゑより動きて高く鳴  
れるなりけり

一木鳴ればこのもかのも木々の音園内はただ  
風あれさわぐ

芝原を吹きわたる風あをぞらを走るしら雲春の  
夕ぐれ

しんとして山上の原を行くごとし鳴しづまりし  
春の夕ぐれ

風落ちて夕日にじめる芝原をしづかにかへりゆ  
けるわれはも

次の風おこるたまゆらかそけくも聞ゆる音は何  
の草葉ぞ

芝原のベンチはぬくし春の陽にいかにか久しくあ  
たりたるぞも



篠懸しのがけの木肌かなしも北海ほくかいのあざらしの脊せきに似ら  
く思へば

篠懸しのがけの木肌に沁しみみる春の陽の光さぶしくうるほ  
へるかも

さにづらふ少女のごとくあまりりす温室おんしつの戸に  
花赤はなあかしかも

春の土かぎろひのぼり大ぞらは萬木まんもくの芽の青を  
うつすも

歩み入る植物園の春の晝とほくしづかに鳥なく  
きこゆ

槭かへでの樹き一本いっぽん一本いっぽん枯枝こしのよみがへるべき日の光り  
かも

赤き脊のやうやくうかび來る見ゆ池にひろごる  
大き鯉はも

鶯のこゑは風の音にもあらなくに園の静寂しじまはや  
ぶられにけり

一線は鳥の列り來るなりき植物園のそらあをき  
かも

白樺の高きこすゑに風出でて園内の樹木鳴りさ  
わぐかも

春寒きこの園内のしづけさを破れり叫ぶごとき  
鶯のこゑ

温室の猿はさびしまむ生國の青きバナナもアナ  
ナスも見て

御苑の春秋

つと見やる草木の花のうららかに御苑に入れば  
風かをりけり

さくらの實赤く光れる木のかげに内親王のおん  
沓のあと

青芝のところどころに輪をなしてチュリップの  
花咲きにけらずや

艶は紅き玉のやうなるチュリップひとむら午  
後の風に光れり

くれちかくヒマラヤ杉のうちそよぎ雨氣をはこ  
びるるときかな

晩春の池にわたせる白き橋かささが一羽啼き  
過ぎにけり

曇り日の御苑は雨となりにけりしづかにかへり  
ゆける庭師ら

内苑の鶴啼きてしらしらとちる青きさくらの葉  
にまじる花

おん沓のあとあるごとき水邊の躑躅山吹雨こま  
かなり

しんとして雨など来るけはひなり御苑の空を仰  
ぎけるかも

夢の如く立つ蝦夷松の長き葉のかげかさなれる  
一路のくらし

胸ひらくごとし御苑の青ぞらのもとにひろびろ  
つらなる紅葉

小春日の黄なる芝生を眞鶴まなづるがあゆめり三羽一羽  
また二羽

内苑の池の中島松しげみ巢ねごもるといふ鶴を見  
ずけり

池見ゆれば人のけはひに鶯ういが啼けるその聲もげ  
に世を遠みかも

苑守えんしゅが度たごましやかに案内あんないする白砂の路のもみぢ  
濃きかげ

先帝の御座處ござじよと申す苑守えんしゅのこゑのひびきのふる  
へたるかな

「お父さん！」鸚鵡かぎが呼べばその前の鳥の司つかさはよろ  
こびにけり

日がばつと射したれば玻璃の窓ぬちの九官鳥は  
こゑ立てにけり

かんがるが跳べばつがひのほろほろ鳥ほろほろ  
と啼く御苑の小春日

洋鴨のかすりおきたる紺の羽毛小春日をうけ見  
れどあかぬかも

ひろびろと狭霧のたてば藍いろの空沈みゆく御  
苑のたそがれ

博覽會のあと

戦亂の後にあふごとしくづされし博覽會のあと  
のおぼろ夜

古美術のかけらなど月に光るごとこの夜のあと  
のふままくをしも

市街戦老幼男女の逃げまどふあはれのさまも眼  
にうかぶなれ

わかき女わが家のあとの圓柱に倚るごとし青く  
けぶる月の夜

ここに燃えかしここに燃えし兵火のあとのさりげ  
なく月の夜となれりけり

瞑想はやぶられにけりふと起る森の月夜の秋か  
ぜの音

夜まはりの巡査の白き服のいろ博覽會のあとの  
さびしも

そそり立つ月夜の第一會場の入口のあとの薄白  
きかな

雁のこゑ臺灣館の建物のうへの夜ぞらに消え去りにけり

青黒き夜の蓮の葉のさびし観月橋をわたる秋かぜ

女看守らしきが橋に身をよせてかたれり月の青白き夜を

春 來 る

一脈の春のこころに會はむとし赤良ひく日を仰ぎけるかも

松の葉にちらと春日が流れけり眠るがごとき心おどろく

春來る空うすひかり白雲のながるるなべに鳥啼くきこゆ



葉牡丹のはたけに春の陽がくもり暗きおもひに  
胸重うなれり

早春の夜よ小雨ふり草の芽のそぼぬるるころ消き息み  
を書き出づ

南禪寺松のはやしのくらきかげ残雪があり二月  
のしののめ

草の上の二月の朝の残雪をうち見やる眸めの冷ゆ  
るなりけり

アカシヤの青き芽ざしの雪光る二月の霽れし朝  
の窓かけ

春の芽のあかるく胸にうつりきて新しき路をゆ  
くころかな

遠空の春をたづねてこの丘にすればこまかき草  
のそよげる

春草のうへに映れる夕雲のきえゆけり、この原の  
うすやみ

わが家の椿

春立てばまづくれなるの一輪のわが家の椿花さ  
けるかも

春眞晝窓外かすかに風ありて椿の花に觸れにけ  
るかな

曇りぞら光一すぢ日のさせばぽつと花見ゆ繁葉  
の椿

一輪のしら玉椿すがすがとかなしければぞ君し  
おもほゆ

温かき色にもあるか椿の花わが朝の眼を遊ばせ  
にけり

しらしらと霏ながるる椿の葉青ぐるき葉のかけ  
に花見ゆ

すべての親<sup>おと</sup>しみがわれによるごとしこの夜の春  
の雨あたたかき

口癖に死なねばならぬといひし人も正<sup>しょうたい</sup>體なくね  
むる春の夜の雨

春の夜の家の秘密をうかがひてゆくらし戸外<sup>そと</sup>の  
微<sup>なほ</sup>温<sup>ぬめ</sup>きかぜ

春ぐもり

目にうつる木蓮の花のくれの色わが世ふけたる  
こちちするかな

木蓮がくだけちるまたくだけちる見てをれば氣  
もくるほしきかな

わが住める世界の外の景色とも見ゆれさくらに  
雪のふれれば

さくらの花うこんのいろのあはれさよ夕ぐれ雪  
はふりつもるなり

春ぐもり俄かに雪となりにけりさくらの花の青  
き夕ぐれ

木蓮の花にうもれし二階家の窓よりゆるうギオ  
ロンが鳴る

籠の鸚鵡往來の人をかからかへりほそき出窓の春  
の夕ぐれ

夏の夜

ブラジルの咖啡カヒといふに夏の夜のわが舌に沁む  
あつさもうれし

河岸の夜のカッフェーの圓き卓にちるアカシヤの葉  
の青き一ひら

カッフェーの女のかけしエプロンにいたづらがきの  
繪の具のにじみ

カッフェーの舌にのこれるあつさにぞおもひいづる  
夏の夜のはかなごと

泣くごとき支那の女のうたひごゑその水いろの  
服の夕ぞら

夏の色満つ

原いつばい夏となりけり草の色木のいろ空の色  
みな青く

草ふみてゆけば次第に草になれ目に青き野もな  
くなりにけり

ポツンと人間ひとが一つ青き野に見えたる時のあは  
れなるかな

おだやかに五月さつきの原の陽に蒸して青き香をこめ  
霞みわたれり

青き野の草より草に夏の風ありとしもなく吹い  
てゐるかな

ふつふつと木かげは泉わきこぼれ黄なる躑躅の  
咲いてゐたりき

けだるげに五月さつきの晝ひるを二階家かたやの手すりに女野を  
見てあるかも

ゆけどゆけど野は單調のみどりなりぼんやりと  
人歩み來れる

廢庭の入口に犬長く寢てたちどまりたる吾を知  
らずけり

草長きあひだに瀬戸の花臺の端の缺け目の光り  
見ゆるも

黄に腐れ木蓮の花ちりしける廢庭に夏らしき陽  
がさす

廢庭の夏のあはれのしみじみとちかく蛙のなき  
しきりけり

土蜘蛛が膝に來れり廢庭の青葉をぐらきなかに  
いこへば

いつか晝の蛙かへるのなかずなりたればしんと物の音ね  
もせざりけり

生きねばならぬ事の無意味におもはれぬ廢庭の  
中をひとり歩めり

朴の葉のしげり \* 舊き門生等と山王臺に會して

年を経て逢へばどの顔もどの顔も大人おとなびたれど  
懐かしきかな

朴の葉のしげれる丘の夏の陽ひに青みてぞ見ゆ街  
の瓦屋根

水あをき臺灣船に夏の雲うつれり眞晝しづけき  
茶寮さしやう

京なまり狎なまにもものいふ茶寮守りの老女が顔の艶なま  
めかしけれ



梅雨<sup>つゆ</sup>ちかしすべての音のしづまれる灰いろの日  
にわれは呼吸<sup>いき</sup>する

青き蟲飛び來りわれのさかづきの雫なめぬ夜  
もふけにけり

あかしやの並木の花が眼に見ゆと心大連<sup>たいれん</sup>に君は  
あるなり — その日滿洲より歸京中の佐藤蘭舟の扇に —

雜司ヶ谷所見

鬼子母<sup>きしぼ</sup>神鈴<sup>かみね</sup>を鳴せば千人<sup>ちん</sup>の子わつと森より出で  
くる如し

鈴の音は森にこだまし侍<sup>た</sup>てるわが胸をさびしく  
動かせりけり

木の間に見る入目<sup>いりめ</sup>吉祥果<sup>きくじょう</sup>のいろの如し印度更紗  
のさめし色の如し

けたたましく鈴が鳴りけりわれの外に寂しき人  
のなほありぬらむ

青島陥落に市街のどよむ日をひとりしづかに郊  
外にあり

晩夏初秋

初秋の草花が咲く澄みわたるあかつき空の藍い  
ろもあり

しづやかに晩夏の日はくれゆけり常盤木の花白  
う浮べて

晩夏の蒼くをぐらき林間の草舎に人を訪へる朝  
かな

水の如き夾竹桃の白き花朝ぞらのもとに呼吸づ  
きてあり

眼に来る君のおもかけましろなる夾竹桃の花は  
さみしも

この朝の夾竹桃の白き花わがかなしみを見まも  
るごとし

白き花夾竹桃ときくからに夏のあはれのまつは  
れるかな

おもひでのくるしき夢におそ夏の夜半の心のい  
ねがたしかも

驟<sup>はるかめ</sup>雨いたれるごとし夏青きポプラ並木に風鳴り  
くれば

山桃のさみしき花にわがこころいささかひかれ  
來にけるこの家

秋の心

園丁がうすくれなるの睡蓮を水盤にうつしをり  
秋の朝

大きなる池にましろき睡蓮がうかびぬ秋の夜  
明けの水に

花が咲く秋の夜明けの睡蓮のうすむらさきもろ  
す紅るも

魚の鱗ひかれり秋の睡蓮の花さく池の水のくら  
きに

つと落す眼に睡蓮の秋の花ひらめき入れり暗き  
水甕

黄ばみたる芝生のうへにのんびりと寝てみたる  
秋の午後の心

起き上り欠伸うちびをすれば芝原の秋のしづけさにこ  
だまするかな

十三夜さびしき影をつくりけり寝ねしわが兒を  
抱きゆく路

窓あけてうす雲に透く月光を仰ぎ見ぬ十三夜な  
りけり

寝ねむとして机の上をかたづけぬ外そとには後の月  
てる夜なり

今日もまた心にそはぬもの書きて息やすむ夜は來ぬ  
いざねむりなむ

菊咲く

さびしらに秋の薄日は照りにたり山の平らに菊  
の咲けるも

山菊の瓣にふれたる感覺のある日の冷えし君が  
手のごとし

籐椅子をひなたにいだし倚れるわが前に山菊香  
こそ匂へれ

山菊の香さへいろさへ世の人にしたしませず秋の  
陽に白きかも

秋山のしづくにしみて生ひし菊白く光りて花さ  
けるかも

秋鳥にからかはれゐるこちしぬ輕き頭痛<sup>づ</sup>を覺  
ゆる窓に

風のあと夕日にじめり一人のさびしき秋を見守  
れるかな

風の前のしづけさのごと近く見てしたしみがた  
き暮れの丘の色

細縞のネルの單衣に初秋の君がたちるの輕きこ  
とごと

秋の夜の灯のあかるきにある時の君が動作のつ  
と浮びくる

雪のおもみ

しんしんと雪降る夜半の草木のおもみが胸を壓  
し來ぬるかも

長く曳く雪夜の青き瓦斯の灯のひとり路を照  
らしぬるかな

煉瓦塀まだらに白くつもりけり深夜の雪は音な  
くも降る

落葉らくえつの月夜に黒きかたちしてひるがへり地にか  
さなりにけり

冬の月てれり、か青あをの竹林のなかにましろきかけ  
をおきつつ

林間に月がさし入り猶おち葉長きかたちのあは  
れに見ゆれ

雪崩なだれの音しづかにこころあらむとする夜のわが  
胸を冷しけるかも

森のうへの暗き夜空ゆしらしらと雪ぞふりくる  
かなしき眸めの前

冬の木の春にうつれるそのころの明るさものを  
したしくおもへる



うるみたる青空ながら暮れゆきて三つ四つ春の  
星てる夜なり

妹をかなしむ

妹をかなしむ

空すめるありあけごろにいもうとの永く眠りし

南高輪みなみたか

ほほゑみて逝きし妹の死にがほに落さじとするわ  
がなみだかな

神無月なづき末の六日の日がてればしらつゆよりもき  
よくうせにき

しらしらと夜明けにちかく妹のいのちやうやく  
きはまりゆくも

わがいのちこよひかぎりよ、こころよく語りて死  
なむ、かくもいひにき

水の如く心はすみて執著も未練もあらず死にゆ  
けるかな

念佛もとなへず辭世の歌もよますひたすらにた  
だ亡母のもとへと

をしへ手に右の手とらせ左手はわれにあづけて  
永く眠りき

終焉の安さかたれば聖さびませりと人のいふに  
も泣かる

一生いっしやうひとりをまもり處女たこめにて清く清く世を終り  
たるかな

妹は生きてなほ世にありとおもふ小春の日ざし  
ぬくき今日など

風の如くに

われを呼ぶ妹のこゑのさやかに聞ゆれ深夜しや風の  
如くに

魂たましひは死なずといひし妹のわがさびしさを訪はむ  
とせしか

耳にしみ胸にとほりてその聲のえやは忘るるそ  
のこゑの

わがこころ凍れる川の如くなり久しく春の陽に  
あはぬかも

こころより笑ひしこともなきわれのさびしさを  
よく慰めしかな

妹をおもへばなみだかぎりなし歌をおもへば哀かな  
愁よにゆく

ある時は姉とも思ひぬわが歌の高くやさしき批  
判者なりし

星の夜に草間をながれあへぬ水ちらと見えしは  
凍れるなりき

わがからだ哀愁かなしみを盛もる器具のごと暗室の隅に置  
かれたりけり

わがこころ暗し百日ももかの忌となれど空の光りは春  
めきたれど

初春哀愁

うららかに戸外とのもは春の日とならむ妹の喪もの明け  
ちかみかも

初春の陽かげのどけみ妹のおとなひ來くらむすが  
たしおもほゆ

初春の青ぞらをゆく雲のありわれはうれへを遣や  
るすべもなし

初春の青空を見てさびしさの新に胸を刺すおも  
ひかな

籠り居れば冬のをはりも初春も知らず戸外とのもに陽  
の紅あからめど

ぐわんと鳴り出したればおどろきぬ氣づかさり  
ける村寺の鐘——二首、旅に出て——

原つばに赤き伽藍が立てりけり風しづまりし春  
の夕ぐれ

山茶花の赤き花びら落ちにけり落葉のふかき有  
明ごろに十以下、妹のあらぬ家にて

山茶花に風寒ければ障子さし妹のあらぬ部屋を  
さびしむ

どこを見ても妹はあらず初冬の陽は室内にかけ  
りたるかな

妹のあらねばみなみ高輪の家は氷室の如くさび  
しも

妹の家はとざされ日毎日ごと森の落葉の雨ふる  
如し

妹の新盆に

妹の來るといふにいそいと日の暮るる待ち苧  
殻をぞ焚く

妹の來しとおもへば賑はしく家内あかるきとも  
しびのいろ

妹よ、ひそかにまたも呼びてみつ魂棚の灯を見ま  
もりにけり

妹よ汝れとおもひし南のみ空の星は見えざりに  
けり

日暮るれば窓より見えし一つ星わが眼を去りて  
消えにけるはや

驚き哀しむ

妹はまことに死んでしまひしかふつとおもひふ  
つとおどろく



妹は夾竹桃のさく家にいまもしづかに病みてあ  
るごとし

妹の一周忌とぞ人はいふ秋かぜの前におどろき  
哀しむ

生きてあれいづくのはてにか生きてあれ秋風を  
聴き夜半におもへる

このゆふべ空に秋風地にわれのひとりのすがた  
妹をおもふ

秋のそらま低く垂れて風さびし蕭條としてわれ  
一人なり

秋心と後の名をつけ泣きし夜よその夜の心また  
秋に逢ふ

妹をおもふ時のみわがころわがもののごと明  
かなりけり

しんとして蟲なく晝の谷中みち妹の墓が見ゆれ  
丘の上

妹に逢ふべき道か蕭蕭とあかつき露を風わたる  
なり

鐘のひびき \*川崎大師堂にて

ありがたき御經なるかもいづこにか妹のゐて聽  
き入るごとし

大師堂夕日さし入り消えゆけど御經はいまだや  
まざりにけり

妹の法名を唱へ出しつる讀經の後の身に沁むこ  
ろかな

經をはり鳴らせる鐘のひびきにぞわが哀しみは  
つつまれけらし

夕陽は堂のうしろに没しけりきざはしくだる襟  
さむみかも

莊嚴の秋の夕日は沈みゆくきざはしくだる一歩  
一歩に

身はひとり蕭蕭として夕暮の鐘におくられ山門  
を出づ

妹の一周忌に

一周忌の法事の鐘が鳴りにけり小雨あがりし秋  
玉林寺

牧水の讀經ききゐる横がほの歌おもふ時のごと  
く尊し

新月院秋心妙英大姉とぞ御墓の文字もじのいちじろ  
きかも

曇りぞら仰ぎて黙すわが顔に一ひら落葉おちばかかれ  
る墓畔ぼへん

旅の手帳より

京都へ

春雨の窓にあたるもうらさびし夜汽車にゆられ  
妻子をおもふ

わがあらねば寝ねすと兄の廣兄はもむづがらむ  
汽車は山北を過ぐ

明けわたる美濃の平野に雨霽れて風習習とわが  
汽車を吹く

白塗りの汽船が藍をただへたる近江の瀬をいそ  
がずゆけり

白汽船おもちやの如く小さく見ゆ廣兄が居らば  
取らむといふらむ

てつぺんに雪が残りてその上の空は春なり近江  
の山山

京の春より秋へ

花ひらく前の日ごとの晴れぐもり京に橙里を見  
ざるさびしさー以下三首、なき岡橙里を懐ふー

祇園ざくら花はさけれどあるじなき平安畫房の  
春のをぐらし

祇園町橙里が住みしあとといふさびしき町の名  
となりぬらし

春を病む晝伯の庭に飼はれたる兎があそぶ三つ  
四つかな

春の夜の新京極しんきやうごくにこれやこの和泉式部の寺のを  
ぐらし

春の雨和泉式部の寺にふり新京極の夜ぞふけに  
ける

白き雲空をながれて門院もんゐんの剃髮塚ていはつづかに陽がかげり  
けり―長樂寺にて―

まめだちてもてなすわかき友の家に春の十日は  
とくすぎにけり―以下三首、山田露禾の家にて―

甘すゆき柑子かんじの花をぬらしふるひねもすの雨よ  
ろし君が家

鳴りいづる京都の午<sup>ち</sup>笛<sup>ふえ</sup>のどかさよ妻へたよりの筆<sup>お</sup>搦<sup>お</sup>きし時

\*

三<sup>さん</sup>本<sup>ぼん</sup>木<sup>ぎ</sup>やなぎを前の宿にゐてあさゆふききぬ鶯のこゑ

柳青き川原に雨のそぼふれり軽くつかれてめざめにしかな

やや重く赤むまぶたのうつとりと濡<sup>ぬ</sup>るる柳を見てありぬ君

この朝のしづけさに二人かくてゐることの何がなしとがめられつもの

清<sup>きよ</sup>水<sup>みづ</sup>より圓<sup>まる</sup>山<sup>やま</sup>へ行く雨のあとのほかほか軽き暖かさかな



息切れのすれば築土の夕ざくらあかるきかげに  
君のいこへる

圓山のさくらに京の人人のつどへれど春のもの  
しづかなる

そよ風の如く耳に来る京なまりベンチに君と憩  
ひてあれば

ほのじろき音にうぐひすの一二羽の啼く圓山の  
春の夕ぐれ

松ばやしもやあるうへに春の星てるかはたれを  
瓢亭に入る

明日は遠くわかれてかへりいなむ身かあぢきな  
く吸ふ白魚の羹

烏丸からすまる通りのあさの新緑しんりよくのポプラ並木に風がゆく  
なり

五條坂古物店ふるものみせのおらんだの藍いろの壺に夕日が  
させり

藍いろの陶器にふれし手のぬくみ阿蘭陀といふ  
親しみのする

若葉のいろが眸めにしみ清水しみずの店の陶器はみな青  
く見ゆ

高野槇たかのあざに初夏はつなつ雲うものゆききする君が二階の朝ぼら  
けかな

日盛りの旅人の眸めのおとろへに加茂川の洲すは青  
く燃えをり

そそくさと來てそそくさと京を去る夜ぞらに月  
の缺けたるがあり

鐘鳴るや三千院さんせんいんのすみわたるあかつきの氣に涙  
おちぬれ以下、大原にて

秋の鳥高啼きてまたしづまれり三千院の溪たにみづ  
のおと

大原や夕つゆしろき道芝にたたずみて誰れを待  
つやらむ尼よ

袖をおほふ尼がけはひに過ぎゆける大原おはらの里の  
夕かぜの中

戸をおして出でくる尼の横顔の夕日のなかに青  
白く見ゆ

夜あくるか平等院の鐘の音のきりの中なる水に  
ひびける ー以下、宇治にてー

宇治の夜はあくれど霧ははれやらす千鳥のこゑ  
の遠方にする

霧のなか舟をいださせさすらひの旅を伏見へま  
づとりにけり

月夜の火事 \*京の思ひ出

月の夜に線香花火の如き火が燃えあがりけり黒  
谷あたり

橋板をふみならしゆく消防夫らの悠長さ京の月  
夜の火事に

火事ははや消えしやらむ月かげの加茂の川瀬に  
照れるなりけり

物干場に火事見の人はなほ去らず月夜に東山は  
けぶれり

しづかなる京洛中を動かせる月夜の火事のたわ  
いなきかな

京人は提灯かざしかけゆけりさりげなき火事の  
あとの月夜に

ぼろと燃えて月夜の靄に吸はれたる火のいろも  
京は柔かきかな

「火事や」「火事や」しづまりはてて加茂川の瀬の音  
のみ月夜は白し

橋の上に舞妓も火事を見てゐたり京の火事はも  
艶めけるかも

夏より秋いく夜旅寢の京の宿におどろかされし  
月夜の火事かな

「お客さん火事や」と呼ばれ振り向けば足音がのこ  
る旅館の廊下

京の山

雲ヶ畑御獵のあとの春寒み遠音に啼ける鹿もあ  
らなく

傷ける野猪が一つ残雪の谿かげにゐてうごめく  
あはれ

枯芒の中にこもりて三日三夜息もせざりし小鹿  
なるかも

ひそみるし鹿がはじめて山上の春日に生の瞳を  
ひらきけり

京の山春さむければ鳥啼かず椿の花の白くさけるも

惟喬の親王がのがれし小野の里千年の末に君住めりけり

残雪に月ある親王がいほりあと鹿がたたすみ啼きゐたりけり

春の夕日はつとさしたる小野の里明るき孤つ松のさびしも

ひとつ松に夕日きゆれば小野の里峯の上の雪が白きなりけり

青芝の上 \*川崎にて

掌を合せしころしづかに考へぬ大師公園の青芝の上に

風光り青みはじめし芝のうへに病後のつかれやすめたるかも

丹頂の鶴がひよいひよいあゆみきぬ風光る青き芝原のうへ

屋根瓦一ぱいに春の陽をうけし大師の御堂瞻仰げけるかも

屋根瓦のうへにわづかの風が見ゆ陽の光りやうやく濃き中に

媼らにまじり大師の樓門をくぐればつと舞ひくるしら鳩

媼らは御蠟まゐると呼びてけり御堂に黒く燭がならび燃ゆ



小雨ふる川原 \*調布にて

ポツポツと微雨<sup>こま</sup>があたり川原石ぬれゆきにけり  
ぬれはてにけり

藍色の水うすしろく雨<sup>あま</sup>もやは土堤<sup>ど</sup>の櫻にかかり  
たりけり

石多き川原のうへの遊園地辛夷<sup>しんぎ</sup>の花のさかりな  
るかな

雨ばれに雲雀のこゑのしきりなり旅館のうらの  
青き麥畑

畑中の電車乗り場の蒲公英にひるまへの陽<sup>ひ</sup>はか  
げりたるかな

ひるすぐれば土堤<sup>ど</sup>の櫻の淡きかげ長くつづけり  
川原の石に

雲切れて春陽が射せばてらと川原の石の白  
く光るも

いかだがつづいて行けり春の陽に青める水の末  
は光りて

川原の晝漁師の子らははだかなり鮓がとれぬか  
石投げ遊ぶ

鮓を煮る汁のこぼれが臭ひくる茶店の裏の春の  
ひるすぎ

人つれてそぼふる雨に多摩の郡調布の町へ迷ひ  
來にけり

大樺町のいりくちの角店に青き芽もせず雨しづ  
くせり

他國人と思ひてかわれを楊柳やうりゅうの垂れたる町の家  
に犬吠ゆ

「みつまめ」と赤紙に書ける家の前雨ほそぼそとふ  
りそそぎけり

一人の行くかげもなし雨のふる舊街道の春の夕  
ぐれ

しよざわいもなく夕ぐれの町に立つ半鐘臺の高  
きことかな

たどりつきしこの旅館は灯ひともりて大時計鳴  
りさびしかりけり

ねむくなればすでに蒲團は敷きてあり先づ旅寝  
することのうれしき

青葉の鎌倉

わかき叔父待つが如くも實朝をおもひて來る青  
葉の鎌倉

實朝も宮の石段昇りつくしほの白き海の氣を見  
たりけむ

大銀杏わか葉しげりて石段の片側は淡き影とな  
りけり

舞殿の静の舞のまぼろしの濃き影となり風かを  
るなり

妹の菩提に長谷の觀世音ねがへる氣にもなりに  
けるかな

妹はわけても長谷の觀世音世にありがたくたの  
みたりけり

鎌倉や青葉のうへに今もかも天日てんびを浴びて大佛ほとけ  
おはすも

わがこころ吸はるる如く目の前の大き像すがたに見入  
りけるかも

御佛の大きこころとわがこころ融け合ふごとし  
風かをるなり

大佛の耳もとに風光りけりうつとりと眼を細め  
たる時

大佛がふともものいはばいかならむ柔らかに五月  
の風薫るなり

霧雨の朝 \*箱根にて

溪溪たにたにに湧くあかつきの靄の中わづかに見ゆる青  
葉の色はも

一山の青葉は影のごとく黒し濛濛として霧雨が  
ふる

隣室の西洋人の白服の朝霧にぬれかへりきたる  
も

心中のあとの部屋

心中しうちゆうの女が呻うめき死にしてふあたりなりしよべ寝  
し旅室りょしつは

松原の茶店の媪おばが心中のあはれをわれにかたり  
けるかな

心中の男をんなはかたのごとこの部屋に来て死  
ぬといふなり

部屋をかへてともいひかねてさりげなくそのあ  
くる夜も寝ねにけるかも

死にに來しごとく死なねばかへりえぬ部屋のや  
うにも哀あはしかりけり

大荒れに硝子戸透きて五百重波あがる見ゆ夜半  
の枕あぐれば

きさらぎの夜明けの濱に白鴉松の落葉をつつき  
てゐたる

生きてありや

京の雪ひとりさびしく病院の窓かけあぐる人あ  
りやなし

生きてありや、京の春寒はるさむ病院の硝子戸にひしと寄  
りくるならむ

その人を思はじとして目を瞑とづる半夜はんやの心しみ  
じみさびし

病院に半夜ねざめてふりつもる雪をききゐるそ  
の心はも

病みやせし身に寒からし朝の雪ぬくき毛布につ  
つまれつつも

智恩院ちおんの鐘おもおもと朝の雪わたりて君がまく  
らに落つらし

兒がこと



兒が世界

ぶらんこに乗りて遊べる兒がこころ小さき世界  
をたのしむごとし

兒の世界大人は知らずぶらんこにゆらるる如き  
心になりたし

たのしめるあの顔のやうな心にてせめてひと時  
あらばとおもふ

しづけさを欲する心兒は知らず椿のかげのわれ  
おどしけり

兒をもつと愛さねばならずと思ひけり若草の原  
を獨り歩みつつ

かへればいつも袂にすがる兒をおもひおもちや  
屋に寄る春の夕ぐれ

小さなる凭<sup>よ</sup>り椅子に見はかけてゐぬ仰<sup>あをむ</sup>向きて白  
き蝶を見てあり

すこやかかのわが兒と病<sup>よ</sup>弱<sup>や</sup>き隣の兒調子が合はず  
遊ばずなりたり

日はあはひの朝顔の垣に身をよせて病兒は空をな  
がめてゐたり

わが病める夜と兒

わが咳によく寝ねたりし兒が目ざめ泣きもせず  
われを見てありにけり

兒が頭撫でつつわれのいふことの遺言の如く何  
ぞさびしき

われ死なば兒は何とせむ戶外には雪がふるふる  
春の夜の雪

われ死なば父のなき兒と嘲まれむそのうしろか  
げ今よりさびしも

亂れたる心の眼のすみくれば兒がゑがほ見ゆ泣  
き顔の見ゆ

我が身邊の兒

兒が傍であそんでをれど苦にならずわが尊き仕  
事の間

露西亞の熊のおもちやを眞黒に塗つて見せたり  
仕事と思ふらし

室内に電車自動車往きかひて兒が賑はしき世界  
なりけり

三角をいくつも書いて居りふと見ておもふ寂し  
き暗示

書棚よりわが著書をのみ選り來り讀むまねをし  
て笑ひけるかな

いちめられ泣いてをらずやなどおもひ戶外のけ  
はひさびしまれけり

年上の友らわが兒を立ててゐぬ青き楓の陰する  
小徑

息こめて喇叭を吹ける健康のわが兒を愛す六月  
の朝

212

門前の廣場のあつき炎天に眞黒になりて鞠投げ  
あそぶ

わが著書にいたづら書きして兒は居たり誰も見  
てぬものの如くに

兒が力かるがるとわが著書を持ちなげうつに何  
でもなきごとし

三四冊かさなればわが著書の重み持ち上ぐる兒  
は倒れけるかな

書棚のガラスに顔の輪廓を兒はそのままに描く  
白鉛筆

213

埃だらけの革囊かばんを出だせば旅にゆくこととわが兒  
はえも離れざり

啼きごゑをうしろに遠くゆく旅のさびしさ思ふ  
兒を傍に

燃えさかる炭火すすびを見つめ黙しゐる兒は今何を言  
ひいでむとする

兒と遊んで大事の書き物を忘れたり青机掛あおこしに陽  
が移りけり

春の夜の散歩に引ける手の汗のしめりもぬくろ  
兒とかへりくる

しみじみと小さきものを慈いづくしむ心起りぬ抱き上  
ぐれば

草むらの青き芒の穂をぬけばさみしくなりぬ兒  
を抱けること

旅なる兒

兒は遠し旅人らしく日焼けして麥藁帽の赤くな  
りぬらむ

父よともえいはで何かさがしゐる兒がいわけな  
さ眼に浮ぶかな

歸りくる時は田舎の訛りなど片言のなかにまじ  
るなるべし

秋の晴れ母に抱かれて汽車の窓瀬戸内海も知ら  
ずゆくらむ

汽車著きてはじめて母の故郷の地をふむことも  
知らずやあるらむ

ザンポアの實れる母のふるさとへ兒はまるまる  
と肥えて行きたり

繪葉書に母が代筆のおとづれの來ぬ日はさびし  
ひとりなるかも

病める兒

熱いでし赤ら兒が顔うちまもり、強しといへばし  
ひて笑へる

新しき玩具おもちゃの電車自動車を走らすれどもよろこ  
ばず兒は

病める兒が大ごゑあげてうたへるは眞夜中なり  
き驚かされぬ

朝しづかにぶらんこの綱がゆれるたり兒は病み  
たれば久しく乗らず



誤解して叱りしこともかにかくにおもはれてな  
らず兒が寝顔見て

この兒いとし父のうれへを知るごとく元氣を出<sup>だ</sup>  
して走りまはれる

兒が病めばわが世は暗くさびしくてももの食<sup>く</sup>へど  
味<sup>あじ</sup>もあらざりにけり

書齋も客間もあらず友つれて横行せりし兒は病  
めるかも

聲荒く叱りて、ぢつと見入りたる兒が瞳<sup>め</sup>にあへば  
うしろめたしも

友だちが迎ひにくれば寝て居れど大ごゑ出<sup>だ</sup>して  
應<sup>こた</sup>へけるかな

この父のさびしき性をさびしめる如き眼つきを  
時にするかも

病める兒とハモニカ

病める兒はハモニカ吹いてゐたりしがふともの  
に怖ぢ臆を閉めにき

病める兒が頬を紅ばませ吹く見ればハモニカの  
音のあはれなるかな

コスモスはなよらそよげり兒が吹けるハモニカ  
の音の澄みて觸るれば

ハモニカを吹きねといへば臥たる子はすなほに  
も身を起すなりけり

兒が誕生日に

秋晴れたりけふのよき日を謳ふべく兒が名の如  
く空の廣きかも

三たびめの誕生日なりおとなしうせよやといへば黙りけり兒は

寫眞屋へゆくなりといへば白き靴ふみしむるさへ力あるかな

新調の洋服を著て秋晴れに外出することの汝れも嬉しきや

空に向ひ大口開いて呼吸すれば兒も同じやうに呼吸したりけり

何を措いても兒が健康といふことの喜ばしきかな青空のもと

歐洲に大戦亂の起れるを知れりや汝も男子の三歳の秋

兒は三歳の秋ぞら高き誇りをば小手あげて歌を  
謳ふなりけり

いくさごとする兒の群れにうちまじりわが兒も  
旗を持ちてゐるかな

兒が持てる萬燈に火を入れてやれば走り出せる  
秋祭りかな

兒が頬のにほひ

兒が頬のにほひ西洋菓子のやう浴みのあとの春  
の夜の淡し

宵の春おもちやの象の鼻の鈴引いてぞ遊ぶおと  
なしき兒と

兒はあはれ玩具のごとし、廻れ廻れといへば廻り  
ぬさびしくなれり

朱樂の香したたるギヤマン皿の中のぞける稚兒  
が顔のまるみかな

兒がもろ手にあまる朱樂を持たすれば黙つて見  
てあり眞晝の縁側

福壽草の前

福壽草のまへに小さき顔ならべ兒はかたことを  
いひあへりけり

兄が妹を見やる慈愛の笑みがほの小さきながら  
ととのひにけり

兒に紙鳶をあぐるすべしらず一月の青空わたる  
風を黙し見る

兒をふたり膝にならべていたいけの娘のえりに  
涙してけり

吸口をくはへてねむる兒が窓まどに秋の夜白くふく  
るなりけり

十三夜さびしき影をつくりけり寝ねしわが兒を  
抱きゆく路

兒が啼けばおきいでて牛乳ちちをあたたむる春の夜  
さむく雲がふれり

雪見ればおどろきてわが袖による兒が三歳さいの春  
のあけぼの

女の兒

櫻の實口くちにふくみておとなしくすわりてありぬ  
わがかたはらに

ふとそばにわが顔を見てゐたる子の小さき瞳まぶたに  
會あひにけるかも

何がなし俊子とよこがつくりしあねさまのお染に似つ  
と思ひけるかな

抱だけばいつか寝入りたる子の頬ほの上にとまらむ  
とする蚊の一つあはれ

「おんとん」とんかく呼ぶことを知りそめて父に能  
辯の子となりにけり

合あ歡わの花咲ければ父に抱かれてそのしづかなる  
花かげにゆく

父に似る女の子はも幸さいありときくからにやすき  
親ごころかな

父のみの子の如くにもしづかなるさびしき子よ  
と慈あやしむかな

女の兒指さす赤き金魚のうろこにわれも見入るなりけり

—了—

大正六年十二月十二日印刷  
大正六年十二月十五日發行

(定價六十五錢)

◀空 星▶

著 作 者 金 子 薫 園  
發 行 者 佐 藤 義 亮  
東京市牛込區矢來町三番地中の丸  
發 行 所 東京市牛込區矢來町三番地  
新 潮 社  
電話番町(八〇九番  
八九九番

番二四七一(京東)替振

印 刷 所 東京市神田區宮本町五番地  
電話下谷四、〇六七番  
新 潮 社 印 刷 部  
印 刷 者 高 橋 治 一



■ 集歌選自代現 ■

(1) 與謝野晶子集 (第八版)	(2) 金子薰園集 (第六版)	(3) 若山牧水集 (第二版)	(4) 吉井勇集 (第三版)	(5) 土岐哀果集 (新刊)	(6) 前田夕暮集 (新刊)
羽二重表紙 特製極美本	何れも其の處 女歌集より最 近の集に亘り 一千數百首を 抜きて一卷と なせるもの、 諸家の自信あ る傑作全集也				定價六十五錢 送料八錢づゝ

■ 集文散の人詩兩 ■

金子薰園氏著 — 第四版 —

■ 自然と愛

附錄 ▼ 特製美本  
別後愛情 ▼ 價五十五錢  
(二百首) ▼ 送料六錢

▼ 報知新聞曰く、散文集にして「季節の移り變り」に於ては四時の風物を叙して精細を極め、「月夜の蜩」其他の小品文に在りては詩味溢るゝが如き氣致、優に作家の範とするに足る。「文章月令」また四季に亘りて人事と自然と相錯綜し相推移するさまを叙し、觀察の微行文の妙、流石は老手也。

若山牧水氏著 — 第三版 —

■ 旅とふる郷

附錄 ▼ 特製美本  
旅の歌 ▼ 價五十五錢  
(二百首) ▼ 送料六錢

▼ 中央新聞曰く、當代の歌人中最も素朴にして感傷的の感情を有する著者が小品文二十及び短歌等を集めたるものにて「山の變死人」以下「秋亂題」に至る小品文は、氏の技巧なる筆致と温雅なる自然觀とを最も能く發表せる懐しき文章なり。旅の歌二百數十首は、著者の自然を愛する情の細かに籠り居れり。

長田幹彦氏著

# 鴨川情話

(版九第)

▼特製最善本、定價九十錢 送料八錢  
本篇は著者が數多き京都傑作中の最傑作を集成せるものにして、長短八篇、何れも織麗且つ濃艶の文字。卷を開けば、銀燭と舞扇と友禪の袂と口べに濃かなる京なまりと、讀者の眼前に去來する京都情緒は、必ずや強き印象を殘すものあらん。装畫は夢二氏の最苦心になる。

竹久夢二氏著

# 三味線草

(版七第)

▼帙入特製、定價一圓十錢 送料八錢  
夢二氏獨特の繪入小唄集にして、口繪挿畫最も豊富、眞に目ざむるばかりの贅澤なる美本也。

□著 氏 勇 井 吉 □

## 祇園双紙

(新刊)價六十五錢 送料八錢  
京阪を歌へる艶麗の戀歌集にして、別に文と歌とを以て京阪名妓を讃せる長篇の附録あり。

## 祇園歌集

(四版)價六十五錢 送料八錢  
祇園、烏原、南地、宇治、嵐山の五箇に分つ。心ゆくばかり戀の都を歌へる奔放華麗の新作集也。

## 東京紅燈集

(再版)價六十五錢 送料八錢  
東京花柳の巷を歌へるもの、歌はれたる東京美人譜にして、亦一種の東京情話とも稱すべし。

